

愛媛県久万高原町岩屋寺 こけら経・笹塔婆について

寺 内 浩

はじめに

本稿は、愛媛大学法文学部日本史研究室により行われた岩屋寺こけら経（柿経）・笹塔婆の調査報告概要である。四国霊場45番札所の岩屋寺は愛媛県久万高原町にあり、一遍上人の修行地としてよく知られている。巨大な岩峰がそびえ立ち、岩壁には数多くの洞窟があるという特異な景観は著名であり、『一遍聖絵』にもいくつもの奇岩が描かれている。岩屋寺こけら経・笹塔婆はこの岩窟の一つから見つかったものである。

1. こけら経

厚さ1mm前後の薄く細長い板（経木）に経文を書写したものをこけら経という¹⁾。

こけら経の文献上の初見は、『百鍊抄』養和元年（1181）10月11日条の、「院に於いて柿葉に心経千巻を書き供養す、俵十二に納む、東海西海に入れらるるためなり、是れ資盛朝臣の夢想に依るなり（於_レ院書_二柿葉_一に心経千巻_二供養_一、納_二俵十二_一、為_レ被_レ入_二東海西海_一也、是依_二資盛朝臣夢想_一也）」である。発掘調査では、京都府鳥羽離宮遺跡（遺跡の年代は12世紀後半ごろ）からこけら経が出土している。また、年号が記された最古のこけら経は、奈良県元興寺極

楽坊本堂天井裏から発見されたもので、嘉禄元年（1225）の銘が記されている。こうしたことから、こけら経は平安時代末期ごろから作成・書写されたといえる。こけら経は中世・近世を通して作成・書写され、今のところ年紀のあるもので最も新しいのは、奈良県岩蔵寺毘沙門天像胎内で発見された正徳元年（1711）のものである。

こけら経は、寺院の堂塔内などから見つかったものと、河川跡などの土中から出土したものと、大きく二つに分けることが出来る。前者の発見場所としては、寺院の堂塔内、仏像の胎内、石窟などがある。具体的には、先述した元興寺・岩蔵寺のほか、岩手県中尊寺では金色堂の須弥壇下などから、奈良県西大寺では骨堂内から見つまっている。また、山形県の立石寺では、石窟内に俵に入れてこけら経が奉納されており、その数は1万点以上になる²⁾。後者の出土場所としては、河川跡、寺院・居館跡、園地跡などがある。具体的には、石川県大野川遺跡では、木箱に納められた状態でこけら経が出土し、福井県一乗谷朝倉氏遺跡では、墓地跡から6束（1束約4,000枚）のこけら経が出土している³⁾。

こけら経の発見・出土場所の数は全国で100ヶ所を超えている⁴⁾。発見・出土場所は東北から九州まで全国に及んでいるが、近畿地方が多く、中国・四国・九州は少ない。四国では徳島県の三つの遺跡（敷地遺跡、中島田遺跡、勝瑞館跡）からこけら経が出土している。点数は遺跡によりまちまちだが、1万点を超えるところはきわめて少ない⁵⁾。

こけら経の作成・書写の目的としては、追善供養、生前に後生安楽を願うて行く逆修供養、造塔功德、写経功德などがあげられている。石田茂作氏は、こけら経を「写経功德と造塔功德の両者を合せ修せんとするもの」（石田茂作1964）、松浦・原田氏は、「柿経は造塔と写経の功德を一度に得るためのもので、制作すること自体に意義がある」（松浦・原田1993）としている⁶⁾。

こけら経の経文は法華経が圧倒的に多く、その他では阿弥陀経、無量寿経、般若心経などが知られている。

写経方法は、1枚の経木の1面に17文字ずつ（両面写経の場合は34文字）の

経文を書写するのが一般的で、法華経8巻をすべて写経すると、両面写経で約2,000枚、片面写経で約4,000枚が必要である。経木の1面に17文字ずつ経文を書くのは、手本となった経典が1行17文字で、それをそのまま写したためである。元興寺極楽坊にはこけら経の手本となった経典が残されており、1行がほしい17文字となっている。また、20行ごとに合点が付されていて、20行がひとまとまりであったことがわかる。

経文は、机の上に経木を並べて書写したり、経木を手を持って扇状にひろげて書写したりした。後者の場合、20本を手を持って各表面に経文20行を書写し、次にそれを裏返して裏面に次の20行を書写したとされる。この場合は第1行目のこけら経の裏は第40行目にあたることになる。なお、こけら経を書写・供養している様子は絵巻物にもみえ、『稚児観音縁起』（14世紀頃成立）や『道成寺縁起』（15世紀頃成立）にそれらの様子が描かれている。

こけら経の経木の作成方法は、一般的にはこけら経幅の原木を鉋（ナタ）状の工具で割る方法と鉋（カンナ）で削り出す方法とがある。鉋状の工具で原木を割ると、経木は比較的厚みがあり、表面には凸凹ができる。鉋で原木を削り出すと、1mm以下の薄い経木も作成可能である。また削り出すため表面はなめらかである。なお、日本で鉋が使用されるのは15世紀ころなので、鉋で削り出されたこけら経の作成・書写は15世紀以降ということになる。経木の頭部は圭頭状（山形）に加工され、側面には切り込みが入れられているものが多い。中には五輪塔状に加工されているものもある⁷⁾。

2. 笹塔婆

こけら経と同じく厚さ1mm前後の薄く細長い板に南無阿弥陀仏の六字名号や各尊の名号、真言等を書いたものを笹塔婆という。形状はこけら経と類似しているが、内容が経文ではないのでこけら経と区別して笹塔婆と呼ばれている。

笹塔婆の発見・出土場所は東北から九州まで全国に及んでいて、その数は70ヶ所を超えている⁸⁾。発見・出土場所は、寺院、岩窟、集落跡、城館跡など

さまざまで、同じ場所からこけら経が発見・出土しているところも多い。時期はほとんどが中世・近世である。なお、『餓鬼草子』（鎌倉時代成立）には、墳丘上に仏龕笠塔婆を建て、そのまわりに多くの大小の塔婆が並び立てられている様子が描かれている。

書かれてある名号や真言はさまざまで、元興寺極楽坊の笠塔婆には「南無阿弥陀仏」の六字名号の他、「大日如来」、「観世音菩薩」、「勢至菩薩」、「地藏菩薩」、「弥勒菩薩」などの名号や真言・種子などが書かれている（辻本泰圓1975）。この他、「南無大吉祥天女」「南無無量寿如来」「南無毘沙門天」「南□歡喜天」（岩手県志羅山遺跡、高橋・羽柴1998）、「十三仏」「一切三世仏」（青森県新城平岡四遺跡、木村2003）、「一切三世仏 七月一日」「一切三世仏 大日如来」（秋田県脇本城跡、竹内2005）、「南無毘沙門天王」「南無明現神」「南無文殊師利菩薩」「南無日大天王」「南無武答天神」「南無八王子」「南無毒蛇気神」（山梨県上窪遺跡、今村2005）、などがある。

笠塔婆の作成目的は、生存中に死後の冥福を祈る逆修のためのものもあつたであろうが、一般的には追善供養のためと考えられている。柴田実氏は笠塔婆について以下のように述べている（柴田実1975）。

笠塔婆と称せられるものは、その形状をいえばこけら経と同じく薄く剥いだ桧、杉、松等の細長い木片（経木）で、多くはその頂部が山形に尖り、上部左右に切込を付けて、塔婆の形を模したものである。ただそこに記されてあるのが、経文ならぬ諸仏の種子や名号、あるいは真言などで、別に死者の戒名やその命日年紀の記されたものもある。いうまでもなく、死者の供養のために手向けられたもので、より鄭重にとならば大きな角材を用いた高い卒塔婆か、少なくとも板状の卒塔婆が用意せられたであろうのに代えて、かようなへぎのように薄い山形の塔婆をもってしたのは、いうまでもなく、より簡易に、よりしばしばそれが用いられるための便宜からであろう。そしてそれこそ広く一般大衆の信仰に応えるにふさわしい形式であつたに違いない。

3. 岩屋寺こけら経

岩屋寺こけら経・笹塔婆の点数は、断簡を含めてこけら経が約5,200点、笹塔婆が約2,400点、判別不可の断簡が約9,200点で、総計は約16,800点となる。

岩屋寺のこけら経は、経木の表裏両面に経文を書いたもの（以下両面写経とする）と片面にのみ経文を書いたもの（以下片面写経とする）に分けることができる。

(1) 両面写経

両面写経のこけら経は、完形（完形に近いものを含む、以下同じ）のものが約1,400点、断簡が約1,000点ある。完形のものの長さは260mm～300mm、幅は15mm～18mm、厚さは1mm弱である。いずれも頭部は圭頭状に整形され、頭部左右側面に二本の浅い切り込みがある。経文は、一本の経木に17文字（四字語句が続くところは16文字、以下同じ）が書かれている。これら両面写経のこけら経のうち1,438点について、仮番号1-1438を付して写真撮影を行い、経文の調査を行ったところ、その多くが法華経、一部が阿弥陀経であることがわかった。

(ア) 法華経

書体は、楷書体に近い比較的判読しやすい文字（以下Aグループとする）と右下がり字形が崩れ判読しにくい文字（以下Bグループとする）の二つに大きく分けることができ、各グループの書き手は同一人である可能性が高い⁹⁾。この二つのグループのこけら経には、経文の同一箇所を書写したのがあるもので、この二つのグループはそれぞれ別の法華経と考えられる。つまり少なくとも二部の法華経が奉納されていたことになる。

写経方法は、他地域のこけら経と同様20本がひとまとまりになっていて、20本の経木に経文を書写し、20本目の裏から経文の続きを書写している。つまり、20本目表面最後の文字は20本目裏面の最初の文字に続いており、したがって1本目の経木の裏面が最終行ということになる。今回の経文調査では、こうした20本がセットになっているものが9組（Aグループ5組、Bグループ4

組)、19本がセットになっているものが1組 (Bグループ) 見つかった。以下、これらセットになっているこけら経の『大正新修大蔵経』の頁・行数と観察結果を記す。

Aグループ

- ① (表) 19頁上段16行目～19頁中段 9 行目 (写真1)
(裏) 19頁中段 9 行目～19頁下段 2 行目
- ② (表) 19頁下段 2 行目～19頁下段25行目
(裏) 19頁下段26行目～20頁上段23行目
- ③ (表) 21頁中段 5 行目～21頁中段28行目
(裏) 21頁中段28行目～21頁下段23行目
- ④ (表) 21頁下段23行目～22頁上段19行目
(裏) 22頁上段20行目～22頁中段18行目
- ⑤ (表) 22頁中段19行目～22頁下段10行目
(裏) 22頁下段10行目～23頁上段14行目

Bグループ

- ⑥ (表) 14頁中段 6 行目～14頁下段23行目
(裏) 14頁下段23行目～15頁上段21行目
- ⑦ (表) 15頁上段21行目～15頁中段17行目 (20本目は欠)
(裏) 15頁中段20行目～15頁下段16行目 (20本目は欠)
- ⑧ (表) 16頁中段11行目～16頁下段 3 行目
(裏) 16頁下段 3 行目～16頁下段25行目
- ⑨ (表) 17頁中段10行目～17頁下段 2 行目
(裏) 17頁下段 2 行目～17頁下段26行目
- ⑩ (表) 31頁下段10行目～32頁上段 2 行目
(裏) 32頁上段 2 行目～32頁中段 8 行目

- 1) 片面はなめらかだが、その裏面はざらついているものが多い。
- 2) 頭部はいずれも圭頭状に調整されており、同一セットのなかには同じ形のものはいくつか見られる。(20本がすべて同じ形となっているわけでは



写真1

ない)。またこれら同形のものの頭側部の二本の切り込みをみると、その位置は全く同じである。こうしたことからすると、頭部の圭頭状調整と頭側部の切り込みは、経木を削り出す前になされていた可能性が高い¹⁰⁾。

3) 同一セット20本の長さや幅は同じだが、セット間では長さや幅が異なっている。①②は経文が連続しているが、①は長さ258mm、幅17mm、②は長さが288mm、幅が17mmある。また③④⑤も経文が連続しているが、③は長さ293mm、幅15mm、④は下端部欠損のため長さは不明、幅は18mm、⑤は長さ293mm、幅15mmである。このように③と⑤は長さ、幅ともだいたい同じだが、それ以外はいずれも異なった長さ、幅である。こうしたことから、経文の書写にあたっては、多くの経木から一本ずつ随時選んでいたのではなく、長さや幅が同じ経木20本があらかじめ用意されていたと考えられる。

4) 経木の上端、下端は欠損・腐食している場合が多いのだが、同一セットの20本については欠損・腐食部分の形状が極めて似ているのに対し、別セットの20本とはその形状が大きく違っている。したがって、書写・奉納後長期間にわたって経木20本は重ねてまとめられていたようである（紐か何かで括られていたのだろう）。つまり、岩窟へ全巻約2,000本が奉納され、その後全体がばらばらになっても、20本のかたまりは長い間崩れなかったであろう。

5) 経木はかなり薄いので、扇状に20本の経木を手を持って書写したとは考え難い。書写方法については今後の検討課題である。

なお、上記①の薬草喩品第五、④の化城喩品第七以外にみられる品名は譬喩品第三、信解品第四、授学無学人記品第九、提婆達多品第十二、如来寿量品第十六、分別功德品第十七、随喜功德品第十八、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四である¹¹⁾。

(イ) 阿弥陀経

仮番号442、537と601-625が阿弥陀経である¹²⁾。このうち442と601-618、621は同一の経木・字体で、長さは300mm、幅は15mm、厚さは1mm弱、多くは上下端が欠損していて、完型のもの少ない。いずれも頭部は圭頭状に整形され、頭部左右側面に二本の浅い切り込みがある。法華経と較べると経木は細長く、経文はやや右下がりですみじみで書かれている。この他の537、620・625（620と625は接続する）も阿弥陀経だが、601-618などとは明らかに経木も字体も異なっているので、阿弥陀経は二部以上あったことになろう¹³⁾。

(2) 片面写経

片面写経のこけら経は、一本の経木に17文字の経文が書かれたものと一文字の経文しか書かれていないものに分類できる。それぞれの数量は、17文字のこけら経の完型は171点、断簡は約2,300点、一文字のこけら経は完型に近いものが38点、断簡が約280点である。

このうち17文字のこけら経450点（完形171点、断簡279点）と一文字のこけ

ら経320点（完形38点、断簡282点）の調査を行った（文字が判読できない一文字のこけら経73点を除く697点は写真撮影をし、仮番号を付した）。

17文字のこけら経の経文を調べたところ、277点が法華経、73点が阿弥陀経、100点が文字不鮮明等のため経典名不明であった。

このうち法華経を記したこけら経の形状は、いずれも頭部は圭頭状に整形され、頭部左右側面に二本の浅い切り込みがなされている。上端と下端が完全に残っているものは少ないが、法量は、長さが256～298mm、幅が15～20mm、厚さが1mm弱である。一本のこけら経に17文字が記され、いくつかの異なった筆跡が認められる。

阿弥陀経を記したこけら経は、経文の同一箇所を記したものが三点あるので（仮番号55、149、157）、少なくとも三部はあったことがわかる¹⁴⁾。このうち経木の幅がやや広い149のグループと幅がやや狭い157のグループについてみると、いずれも頭部は圭頭状に整形され、頭部左右側面に二本の浅い切り込みがなされている。上端と下端が完全に残っているものは少ないが、前者の法量は、長さが256mm、幅が16～17mm、厚さが1mm弱、後者の法量は長さが256mm、幅が12～14mm、厚さが1mm弱である。どちらも字数は17文字、右下がりの字体だが、筆跡は少し異なっている。55のグループは完形のもがなく長さは不明だが、幅は16mm、厚さが1mm弱で、楷書体に近い字形で書かれている。

一文字だけ経文が書かれているこけら経は、いずれも頭部は圭頭状に整形され、頭部左右側面に二本の浅い切り込みがなされている（写真2）。上端と下端が完全に残っているものがないので、正確な長さは不明だが270mmを越えているものが数点ある。幅は16mmほどのものが多い。他のこけら経より明らかに厚みがあるのが特徴である。また、上下で厚さが異なるものもあるので、おそらくは鉋状工具で割って作ったのであろう。判読できた文字は以下の通りである。これらの文字はすべて法華経に見えるが、阿弥陀経には見えないものが多くあるので、おそらくは法華経の経文であろう¹⁵⁾。一文字のみのこけら経はこれまで神奈川県鎌倉市下馬周辺遺跡（下馬周辺遺跡発掘団1998）、山形県山形市立石寺（山形県立博物館2009）のものなどが知られている程度であり、全国



写真2

的にみて珍しいものといえよう。

「依」「一」「因」「悪」「慧」「億」「為」「于」「以」「於」「亦」「具」「関」
「劫」「現」「香」「可」「訶」「楽」「皆」「供」「各」「見」「競」「下」「我」
「経」「勤」「給」「及」「其」「遇」「恭」「講」「棄」「権」「己」「國」「隨」
「之」「衆」「僧」「算」「種」「諸」「深」「想」「此」「者」「時」「尔」「斯」
「衆」「而」「将」「乘」「身」「如」「耳」「施」「舍」「又」「上」「世」「讚」
「是」「雖」「女」「塞」「至」「三」「相」「驚」「声」「心」「若」「悉」「千」
「長」「聽」「乃」「轉」「天」「知」「常」「知」「得」「日」「那」「法」「貪」
「本」「莫」「不」「佛」「父」「方」「怖」「百」「梵」「聞」「寶」「非」「白」
「婆」「菩」「妙」「無」「滅」「欲」「藥」「有」「量」「梨」「力」「来」「小」



写真3

4. 岩屋寺笹塔婆

笹塔婆は大型のものと小型のものがあり、いずれも片面に六字名号、各尊の名号、梵字が書かれている。このうち大型笹塔婆は68点ある（写真3）。長さは、440mmのものが1点、430mmのものが3点、その他は390~400mmである。幅は、最大が400mm、最小が250mmだが、ほとんどのものは300mm前後である。厚さはだいたい1.5mmほどで、うすいものは約1mm、厚いものは約3mmあるが、一本の笹塔婆でも上下左右で厚さが異なっているものが多く、明らかに鉋状工具で断ち割って作られている。頭部はいずれも圭頭状で頭部左右側面には二本の切り込みが施され、15点については深く切り込みがなされている。なお、二点の笹塔婆には下端部に小さな穴がけられている。文字はいずれも「南无阿弥陀仏」で、上半分のところに書かれている。

小型笹塔婆にはさまざまな名号が書かれているが、圧倒的多数が「南无阿弥



写真4

陀仏」である。

「南无阿弥陀仏」と書かれた笹塔婆は、完形のもの約1,400点、断簡が約900点あり、完形のもの長さは183～210mm、幅は19～22mmである（写真4）。厚さは、一部に1mmをこえる比較的厚いものがあるが、ほとんどが1mmに満たないうすいもので、明らかに鉋で削って作られている。頭部は圭頭状で、側面に浅い切り込みが2本確認できる。

「南无大日如来」と書かれた笹塔婆は、計13点あり、このうち12点は、長さ202mm、幅14～21mm、厚さ1mm弱で、頭部は圭頭状、側面に浅い切り込みが2本ある。1点は、長さ250mm、幅14mm、厚さ2mmで、頭部は圭頭状、側面に深い切り込みが2箇所ある。また、頭部に穴がかけられ、下部先端がとがっており、他の笹塔婆と異なり丁寧に整形されている。

「南无日光菩薩」「南无月光菩薩」と書かれた笹塔婆は各1点ある。長さ202mm、幅21mm、厚さ1mm弱で、頭部は圭頭状、側面に浅い切り込みが2本ある。

「南无観世音菩薩」と書かれた笹塔婆は1点ある。長さ202mm、幅20mm、厚さ1mm弱で、頭部は圭頭状、側面に浅い切り込みが2本ある。

「南无普賢菩薩」と書かれた笹塔婆は1点ある。長さ204mm、幅20mm、厚さ1mm弱で、頭部は圭頭状、側面に浅い切り込みが2本ある。

梵字のみ書かれた笹塔婆は、完型が16点、断簡が14点ある。前者は、長さ184～211mm、幅13～16mm、厚さ1mm弱である。頭部は圭頭状、側面に浅い切り込みが2本あり、なかには3本、4本のものもある。

5. その他

こけら経、笹塔婆のほかに細い竹棒、木串、土器もあわせて見つまっている。

細い竹棒は3点ある。それぞれの法量は、長さ177mm、幅3mm、厚さ2mm、長さ155mm、幅5mm、厚さ1mm、長さ60mm、幅6mm、厚さ2mmである。他地域の例からみて、この竹棒はこけら経の束をたばねる籬（たが）とみられる。

木串は3点ある。いずれも頭部が折れ、下端部にかけて細くなっている。それぞれの法量は、長さ193mm、幅10mm、厚さ8mm、長さ186mm、幅13mm、厚さ10mm、長さ102mm、幅5mm、厚さ5mmである。

土器は2点ある（1点は二つに割れている）。これらの土器について、石岡ひとみ氏は、「胎土が緻密な土を使用し、白褐色である。杯の内外面はナデにより段がつく。もう一点の破片も杯の口縁部と考えられる。成形技法などから、中世後期の土器のものと思われる。燈明具としての使用痕がなく、儀式や儀礼用の供献具に用いられたものか。」¹⁶⁾としている。

6. 『四国遍礼霊場記』について

『四国遍礼霊場記』は、高野山の学僧寂本の著書で、元禄2年(1689)に刊行された。寂本自身は四国遍路の経験がなかったが、『四国遍路道指南』の著者真念とその同行者である洪卓から資料と図面の提供を受けて著したものである。この書は札所ごとに説明文と境内図が載せられてあり、17世紀末の札所の様子を知ることができる貴重な資料である。

『四国遍礼霊場記』の岩屋寺の境内図で注目されるのが、本堂の上の岩壁に「ソトバ」、「アミダ」と並んで「仙人窟」があり、そこに木片らしきものが見えることである¹⁷⁾。その説明文には、仙人堂上の「卒塔婆」、不動堂上の巖窟にある仏像の次に、「其近きほどに仙人窟といふあり、彼仙尸解の所といへり」とある。

周知のように、仙人については、『一遍聖絵』第二の「菅生の岩屋」に、「このところは観音影現の霊地、仙人練行の古跡なり。(中略)仙人は又土佐国の女人なり。観音の効験をあふぎて、この巖窟にこもり、五障の女身を厭離して一乗妙典を読誦しけるが、法華三昧成就して飛行自在の依身をえたり。(中略)仙人利生のために、遺骨をとどめ給。一字の精舎をたて、万人の良縁をむすばしむ。」(大橋俊雄2000)と記されている。このように岩屋寺には古くから仙人伝承があり、そのため江戸時代にも「仙人窟」があり、そこが仙人の尸解(「身体を残して魂魄だけ抜け去る術」『大漢和辞典』)した場所とされたのであろう。

このように、『四国遍礼霊場記』には木片らしきものが描かれているのだが、もしそれらがこけら経・笹塔婆であったとするならば、岩屋寺ではこけら経・笹塔婆が江戸時代初期以前に奉納されていたことを示しており、岩屋寺こけら経・笹塔婆が奉納された意味や年代を考える貴重な手がかりとなるであろう¹⁸⁾。

おわりに

岩屋寺こけら経・笹塔婆は中世近世の岩屋寺における仏教信仰のあり方を知る手がかりとなる重要な歴史資料である。また、愛媛県で初めての発見であるだけでなく、数量の多さは全国屈指のものであり、地域にとっての貴重な文化財である。

岩屋寺こけら経・笹塔婆は、他のこけら経・笹塔婆と同じく、逆修供養、造塔功德、写経功德、追善供養などのために作成されたと思われるが、願文に相当するものが見つかっていないため詳細は不明である。また、いつ作成されたかについても、年紀を記したものが見つかっていないので、不明とせざるをえない。ただ、年号が記されたこけら経の上限は嘉禄元年（1225）、下限は正徳元年（1711）であり、他地域のこけら経・笹塔婆も中世後期－近世初期のものが多く、岩屋寺こけら経・笹塔婆もだいたいその頃に作成されたと考えられる。また、数量が多く内容も多様なので、作成は一時期ではなく長期間にわたってなされた可能性が高い。

岩屋寺から見つかったこけら経・笹塔婆の点数は膨大なものであり、本稿はその概略を示したものにすぎない。一点ずつさらに詳細に調査すれば、こけら経や笹塔婆の作成年代、作成者、作成背景、作成技法などがあるいは解明できるかもしれない。しかし、それらはいずれも今後の課題とし、ひとまず本稿を終えることにしたい。

註

- 1) 『日本仏教民俗基礎資料集成六 元興寺極楽坊Ⅵ』（中央公論美術出版、1975年）がこけら経・笹塔婆についての基本資料・研究である。また、松浦・原田1993、足立2006、黒部市教育委員会2013には、各地で出土・発見されたこけら経の概要が載せられている。中世のこけら経の歴史や存在形態については、奥野1974が詳しい。以下のこけら経・笹塔婆の概要説明ではこれらを参照した。
- 2) 戸塚理恵氏は、こけら経が伝世している寺院には納骨信仰があるとする（戸塚2013）。なお、立石寺こけら経について石田茂作氏は次のように述べている（石田茂作1964）。

山形県山形市外立石寺の石窟内に柿経があるとの報告を得て昭和廿六年八月同所に赴き土地の人の協力を得て梯を二つ繋いで石窟によじその柿経を調査した。経は俵に入れて納入されたものらしくその朽損した残欠が柿経と一緒に発見された。そしてそれらの上には土が被さっていたけれども、それは故意にかけたとは思われず窟の上壁が風化の爲自然落下したものと見られた。そうであるならばこの柿経は俵に入れて窟内にただ投げ入れた程度のものであったと思われる。発見の柿経は総数一萬本以上に及び、その内容はしらべられていないが、一部気付いたところでは、無量壽経・金光明経・阿彌陀経・觀無量壽経とがあった。

- 3) こけら経が河川池沼などの水辺から多く出土する点について、松浦・原田氏は「単に時間的経過によって寺院や堂内に柿経を安置する場所が無くなったために河川などに投棄したもの」（松浦・原田1993）とするのに対し、水野正好氏・戸塚理恵氏は、水による浄化という宗教的な意味があった可能性があるとしている。また、水野氏・戸塚氏は、墓地や土坑に埋められたこけら経には埋経との共通点があることを指摘している（水野1988、戸塚2013）。
- 4) 山本2007a、戸塚2011、黒部市教育委員会2013に発見・出土地の一覧表がある。
- 5) 黒部市教育委員会2013によると、1万点を超えているのは、奈良県元興寺極楽坊、同県平城京左京三条三坊三坪、福井県一乗谷朝倉氏館跡、富山県堀切遺跡、山形県立石寺のみである。なお、敷地遺跡からの出土点数は2,000余である（大橋有順2004）
- 6) このほか、戸潤幹夫氏は、境争論が起きた場所にこけら経が埋納されていることから、境界の静謐・庄内の安寧を願ったものとしている（戸潤幹夫1992）。
- 7) こけら経の制作技法については、山本2007a、山本2007b、戸塚2006、同2011、同2012が詳しい。
- 8) 山形県埋蔵文化財センター1997に全国各地の主な笹塔婆出土遺跡が載せられている。また、その後の出土遺跡・概要については『木簡研究』誌上に随時掲載されている。
- 9) Aグループ①～⑤の書体は似ているが、墨を継ぐ箇所が異なったりしているので、書き手は同一人でなかった可能性もある。
- 10) 削り出した後に経木を重ねてこれらの調整をしたとも考えられなくはないが、頭部の調整面はいずれもきれいなので、削り出す前に調整されていた可能性が高い。
- 11) このうち二つは裏に文字がないので、片面写経かもしれない。
- 12) 阿彌陀経の文字数は約2,200なので、一行17文字だと、両面写経で約65枚、片面写経で約130枚となる。
- 13) 仮番号1434は、表に阿彌陀経の経文「槃陀迦難陀阿難陀羅睺羅橋梵波提賓頭」、裏に般若心経の経文「揭帝揭帝般羅揭帝般羅僧揭帝菩提僧莎訶」が書かれている。1434になぜ二

種類の経文が書かれているのかは不明である。

- 14) 仮番号476、511、546、593、613などの筆跡はこれらとまた異なっているので、阿弥陀経は三部以上あった可能性がある。
- 15) この他に、一文字ではないが、同じ文字が書かれたものが6点ある。（「不不不不不不」、「比比比比比比」、「千千千千」、「彼彼彼彼」、「羅羅羅」、「言言言言」（言偏のみ残存）。なお、鳥羽離宮跡から同様のものが出土している（「解解解解解」、「脱脱脱脱脱」、「等等等等」など。京都市文化観光局1988）。
- 16) 愛媛県美術館2014の作品解説35
- 17) 香川県ミュージアム学芸員渋谷啓一氏のご教示による。なお、「仙人窟」のことは、香川県ミュージアム2014の作品解説28柿経・法華経、29笹塔婆（執筆は渋谷啓一氏）でも触れられている。
- 18) こけら経・笹塔婆がなぜ「仙人窟」に奉納されたかは今後の検討課題である。

引用・参考文献

- 足立佳代2006 「柿経」『季刊考古学』97
- 石田茂作1964 「元興寺極楽坊発見の柿経」『仏教考古学論叢三 経典編』思文閣出版
- 今村直樹2005 「山梨・上窪遺跡」『木簡研究』27
- 愛媛県美術館2014 『空海の足音 四国へんろ展 愛媛編』
- 大橋育順2004 「徳島・敷地遺跡」『木簡研究』26
- 大橋俊雄2000 『一遍聖絵』岩波書店
- 奥野義雄1974 「中世仏教信仰におけるこけら経の存在形態」『元興寺仏教民俗資料研究所年報』第8冊
- 尾崎喜左雄1966 「草津白根山湯釜出土の笹塔婆」『信濃』18-1
- 香川県ミュージアム2014 『空海の足音 四国へんろ展 香川編』
- 木村淳一2003 「青森・新城平岡（四）遺跡」『木簡研究』25
- 近藤喜博1973 『四国霊場記集』勉誠社
- 柴田実1975 「総説」『日本仏教民俗基礎資料集成六 元興寺極楽坊Ⅵ』中央公論美術出版
- 高橋実央・羽柴直人1998 「岩手・志羅山遺跡」『木簡研究』20
- 竹内弘和2005 「秋田・脇本城跡」『木簡研究』27
- 辻本泰圓1975 『日本仏教民俗基礎資料集成六 元興寺極楽坊Ⅵ』中央公論美術出版
- 戸潤幹夫1992 「加賀出土のこけら経」『石川県立歴史博物館紀要』5
- 戸塚理恵2011 「こけら経の制作技術」『淡海文化財論叢』3
- 戸塚理恵2012 「こけら経制作技術の画期と形態・経典の選択」『淡海文化財論叢』4

- 戸塚理恵2013 「こけら経の供養と階層」『淡海文化財論叢』5
- 藤原理恵2006 「こけら経に関する考古学的考察」『真朱』6
- 堀正一1966 「草津白根山湯釜出土笹塔婆の年代について」『信濃』18-4
- 松浦五輪美・原田憲二郎1993 「柿経の考察—分類と編年について—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1992』
- 水野正好1988 「中世葬祭供養品の廃棄空間—井相田C遺跡供養遺品の性格をめぐって—」『井相田C遺跡Ⅱ』
- 山形県立博物館2009 『特別展 山寺—歴史と祈り—』
- 山本崇2007a 「平城京跡出土こけら経の整理と保存にかんする研究」『福武学術文化振興財団 歴史学・地理学助成報告書』
- 山本崇2007b 「こけら経の制作技法」『奈良文化財研究所紀要2007』
- 京都市文化観光局1988 『鳥羽離宮跡発掘調査概報』
- 福岡市教育委員会1988 『井相田C遺跡Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集）
- 山形県埋蔵文化財センター1997 『後田遺跡 大道下遺跡』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第49集）
- 下馬周辺遺跡発掘団1998 『下馬周辺遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2000 『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集）
- 京都市埋蔵文化財研究所2002 『鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-8）
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所2005 『来光川遺跡群Ⅰ 仁田館遺跡』（静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第156集）
- 仙台市教育委員会2005 『洞ノ口遺跡』（第2分冊本文編(2)）
- 平泉町教育委員会2008 『平泉遺跡群発掘調査報告書（志羅山遺跡第94・95次ほか）』（岩手県平泉町文化財調査報告書第108集）
- 黒部市教育委員会2013 『堀切遺跡F区出土こけら経調査報告書』

〔付記〕調査にあたっては、岩屋寺住職の大西完善氏、奈良文化財研究所の山本崇氏、彦根市の戸塚理恵氏、愛媛大学の胡光氏よりご指導とご教示を賜った。また、池田あかりさん、入口楓さんをはじめとする愛媛大学法文学部日本史研究室の卒業生・在学生の皆さんには経文調査や写真撮影などご協力いただいた。末尾ながら感謝の意を表する次第である。

本稿は、平成27年度法文学部人文系担当学部長裁量経費による研究成果の一部である。